

「Abflug 2011 — 9つの飛行 —」によせて

今春卒業をひかえる東京造形大学母袋ゼミ有志による「Abflug2011 展」が開催される。

副題には9つの飛行が追記されている。“Abflug”とはドイツ語“離陸”であり、9つの主体の飛行はまもなく始まりを告げようとしている。

赤木遙は、写真によってその一部を切り取ったり拡大する操作をとおして、〈見ることの異化〉を試み、

石川正洋は、〈触知性を孕んだ空間〉を主体の体質、感覚を手掛かりに探求、観者との有機的な交感を目指す絵画を、

清原亮は、印刷ドットと点描法との類似と差異に着目、観者の感覚や意味による理解を拒むような〈絵画の宙吊り化〉を企て、

清水信幸は、触覚性を残しながら位置、重量感を剥奪された色粘土立体をモデルに描く絵画「colored continent」を提示する。

生井沙織は、絵画／テキストの間に横たわる同一性とズレを調停し観者に覚醒を促す〈テキスト＋絵画〉によるナラティブ性の再創造を目指し、

中村江伶乃は〈布と女性〉相関を、女性性がかたちを得て繊維をまとい、布が自立する立体を、

永田惇哉は、大正期の洋画を参照にゆるやかな筆使いと印象深い明暗法のなか、主題性の強い〈極私的物語をつむぐ絵画〉を、

堀口美沙子は、「角型 ツノガタ」と命名した鋭角の多角形を形成素とし、その一辺を契機に連鎖、拡張、折曲の連続のなか、生成されるゲシュタルト画像を、

丸山知美は、ステイニングによって滲む色彩を手掛かりに、〈薄れ行く記憶や余韻〉を連想させる画面を、正面性を表明するストライプによってハーモニカルな全面性絵画を、

それぞれは追究してきた。

この一年間、9人はゼミという共有の場でそれぞれのテーマを内側に保持し、研究、ディスカッションを重ね、自らの表現にフィードバックし研鑽を積み、制作と概念形成を進めてきた。

そして今、それぞれの果実はTURNER GALLERYに一時的に移されようとしている。

9つの飛行の始まりである。踏みしめていた大地を離れることは不安を伴うことだろう。飛行は同時に大地を失うことを意味する。

しかし、それはカントの言う「超越」にむかうことのようにも思えるのだ。皆で川村記念美術館を訪ねたニューマンは、『ワンメント I』とともに論考『崇高なものは今』を1948年に著した。彼が再投入した「崇高」の概念は、ハイデガーが対比的に地平と呼んだ大地に対し、ジップとして垂直に「現前」を果たしている。

僕らの表現が「現前性」にむかうのだとすれば、その場とは決して大地と地続きではない筈である。

「現前」のために絵画は、大地を離れ浮上していなければならない。それら現前を果たした絵画群を思うならば、大地を離れることに恐れはいらぬ、むしろ必要なものは勇気なのだ。